黒猫と猫のジン

新藤悦子
絵・そねはらまさえ

秋も終わりの夕暮れどき、トルコのある村の出来事です。村はずれの家に、一匹の黒猫がうしろ足を引きずってやってきました。玄関の扉が少しあいていて、中に入ろうとしましたが、力尽きたかのように敷居の上にドサッとたおれこんでしまいました。

「なんだろうね……」

その家のおばあさんは気配を感じて、玄関までようすを見にきました。扉から冷たい風が吹きこんでいます。おばあさんはブルッと肩をふるわせました。

「冷えると思ったら、ちゃんとしめてなかったんだ」

おばあさんは扉をしめようとして、敷居の上になにかいるのに気がつきました。

「あれ、やだ、猫じゃない」

おばあさんは黒猫を抱きあげて顔をしかめました。

「なんでこんなところで寝てるの。敷居の上には、ジンがいるんだよ」

おばあさんは猫に文句をいって、すぐに扉をしめました。みすぼらしい猫でした。毛はよごれ、やせ細って、鳴く力もないほどお腹はぺたんこでした。そのうえ足を傷めているようです。

「不細工な猫だねえ」

やっかいなものを背負いこんでしまった、とおばあさんはため息をつきました。

「うちの人が生きてたら、外が雨だろうと風だろうと、おまえなんか放り出すところだよ」

おばあさんはそういって、黒猫をかかえてあたたかい部